

創刊記念『國華』120周年・朝日新聞130周年 特別展
Celebrating the 120th Anniversary of KOKKA
and the 130th Anniversary of The Asahi Shimbun

対決
巨匠たちの
日本美術

DUELING GENIUSES:
THE GREATEST HIGHLIGHTS
OF JAPANESE ARTISTS

対決

創刊記念『國華』120周年・朝日新聞130周年 特別展
Celebrating the 120th Anniversary of KOKKA
and the 130th Anniversary of The Asahi Shimbun

DUELING GENIUSES: THE GREATEST HIGHLIGHTS OF JAPANESE ARTISTS

巨匠たちの日本美術

2008年7月8日(火)－8月17日(日)

東京国立博物館 平成館 [上野公園] Tokyo National Museum [Ueno Park] 

<http://www.tnm.jp/>

開館時間 午前9時30分－午後5時

ただし金曜日は午後8時まで、土曜・日曜・祝日は午後6時まで。入館は閉館の30分前まで

休館日 月曜日 ただし7月21日(月・祝)は開館、翌22日(火)休館。8月11日(月)は開館。

観覧料
[税込]

	当日	前売	団体
一般	1,500	1,300	1,200
大学生	1,200	1,000	800
高校生	900	700	500

※ 中学生以下無料 ※ 団体は20名以上
※ 障害者とその介護者1名は無料。入館の際に障害者手帳などをご提示下さい
※ オルセー美術館コレクション特別展「フランスが夢見た日本－陶器に写した北斎、広重」(7/1－8/3)は別途観覧料が必要です

前売券 発売窓口 チケットぴあ、ローソンチケット、イープラス、CNプレイガイド、サークルK、サンクス、JTB、セブンイレブンほか主要プレイガイドにて発売。詳細は広報事務局より追ってお知らせいたします

お問合せ 03 - 5777 - 8600 (ハローダイヤル)

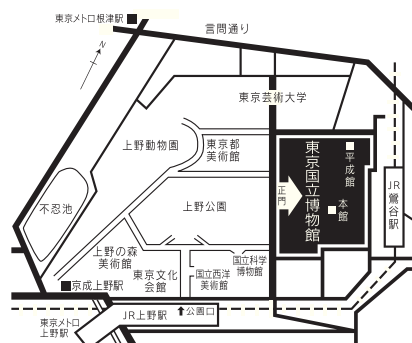
展覧会 公式サイト <http://www.asahi.com/kokka/>

主催 東京国立博物館・國華社・朝日新聞社 

後援 文化庁

特別協賛  DIAMアセットマネジメント

協賛  三井物産  DNP 大日本印刷



報道関係お問い合わせ

特別展「対決－巨匠たちの日本美術」広報事務局(ウイング内)
〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-28-9 ヤマナシビル
TEL : 03-3639-0721 / FAX 03-3664-3833

東京国立博物館・平成館(上野公園)

〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9

交通案内: JR上野駅公園口・鶯谷駅南口より徒歩10分、
東京メトロ銀座線・日比谷線上野駅、千代田線根津駅、
京成電鉄京成上野駅より徒歩15分

展覧会のみどころ

日本美術の歴史に燦然と輝く傑作の数々は、時代を代表する絵師や仏師、陶工らが師匠や先達の作品に学び、時にはライバルとして競い合う中で生み出されてきました。直接の影響関係がない場合でも、優れた芸術家たちの作品を比較すると、興味深い対照の妙を見出すことができます。きらめく才能の拮抗により、各時代の造形芸術はより豊潤に、華麗に開花してきたと言えるでしょう。

本展では、このような作家同士の関係性に着目し、中世から近代までの日本美術史に名を刻む巨匠たちを2人ずつ組み合わせ、「対決」させる形で紹介します。対となるのは、室町時代の代表的な水墨画家、雪舟等楊と彼に続いた雪村周継、安土桃山時代に天下人の御用を激しく争った狩野永徳と長谷川等伯、琳派芸術の原点となった俵屋宗達と、彼に私淑しそれを発展させた尾形光琳、江戸中期に現れた鬼才の双璧、伊藤若冲と曾我蕭白、最後の文人画家と呼ばれる富岡鉄斎と近代画壇の重鎮となる横山大観ら12組。国宝10余件、重要文化財約40件を含む計100余件の名品が一堂に会します。巨匠2人の作品の「対決」を、互いにどのような関係にあったのか、実際に見て比較することができるのが本展の最大の魅力です。

また本展は日本東洋美術研究誌『國華』の創刊120周年を記念して開催するものです。「対決」という斬新かつ簡潔な視点から日本美術史を見わたすことで、『國華』の研究成果の一端を広く紹介できるよう願っています。

鉄斎	歌麿	応挙	若冲	大雅	円空	仁清	宗達	光悦	永徳	雪舟	運慶
VS	VS	VS	VS	VS	VS	VS	VS	VS	VS	VS	VS
大観	写楽	芦雪	蕭白	蕪村	木喰	乾山	光琳	長次郎	等伯	雪村	快慶

※ 会期中、展示替えがあります。原則として前期(2008年7月8日－7月27日)、後期(7月29日－8月17日)の予定ですが、別日程の作品もあります。

詳細は広報事務局までお問い合わせください。本文中、展示期間の表示のない作品は全期間展示の予定です。

※ 番号 11～14もしくは記号 a～x が付いている作品写真については広報用に貸出を行っております。別添の写真借用お申し込み書にご記入の上、広報事務局にお申し込み下さい。



雪舟等楊：秋冬山水図(国宝) 2幅 室町時代・15世紀末～16世紀初 東京国立博物館蔵〔後期〕(部分)



雪村周繼：風涛図(重要文化財) 1幅 室町時代・16世紀 京都・野村美術館蔵〔後期〕(部分)

『國華』とは

『國華』は明治22年(1889)10月に岡倉天心、高橋健三らによって創刊された。岡倉天心の創刊の辞「美術は國の精華なり」に従って、日本東洋の優れた美術についての、第一線の研究者による質の高い論文を掲載し、また埋もれていた名品を数多く紹介してきた。

豪華な装丁や美しい図版にも定評があり、創刊当初は木版色摺り専門の彫師を抱え、その後は精巧なコロタイプ印刷も使用している。

昭和52年(1977)には1000号を迎え、また平成元年(1989)には創刊100周年記念として日本東洋美術の優れた研究成果を顕彰する「國華賞」を創設し、平成13年(2001)からは全冊DVD-ROM化の事業も進めている。

現在も刊行されている美術研究誌として世界最古の歴史を誇る同誌の存在は広く海外にまで知られており、編集委員陣は日本東洋美術史研究の世界的な権威として認められている。研究誌の編集活動のほか、国内外の新出作品の調査や国宝・重要文化財の認定など指定物件の審査などにもかかわり、また海外への流出作品の調査なども精力的に行っている。最近発見された新出作品、狩野永徳「洛外名所遊楽図屏風」の紹介や、ボストン美術館に収蔵されていた葛飾北斎らの肉筆浮世絵の再発見も、國華社編集委員の功績によるところが大きい。



『國華』創刊号 表紙

『國華』編集委員	
主 幹	河野元昭
	小林忠
	田邊三郎助
	関口正之
	高階秀爾
	海老根聰郎
	小川裕充
	佐野みどり
	島尾新
	佐藤康宏
	辻惟雄
名誉顧問	水尾比呂志



永徳

Eitoku VS Tohaku

等伯



2

かのうえいとく
狩野永徳 (1543~90)

ひのきざびょうぶ
左、檜図屏風 (国宝)

8曲1隻 安土桃山時代・16世紀 東京国立博物館蔵

天下人の絵師、永徳の描く絵は「恠恠奇奇」とも評された。黄金を背景に赤茶けた太い幹から大枝を力の限り振りかざす檜の大樹には、天下人の心性が映し出されているのか、見る者に動悸やめまいさえ呼び起こす。

東京初公開!!

らくがいめいしとゆうらくすびょうぶ
右、洛外名所遊楽図屏風

4曲1双 安土桃山時代・16世紀 個人蔵

近年発見された狩野永徳の貴重な真筆のひとつ。平成18年(2006)秋に『國華』に解説が掲載され、東京では今回初公開となる。





狩野派の嫡流にして幼くして天賦の才を
發揮した狩野永徳。圧倒的な力動感の
大画様式は天下人たちを魅了し、彼らの
城館は金碧の永徳作品で埋め尽くされた。
一方の長谷川等伯は能登から単身京に
上り、狩野派全盛の時代の中、苦勞の末
ようやく榮譽を手にする。「雪舟五代」を
名乗る水墨画は、日本の風土になじむ
豊かな情感を獲得している。秀吉の治世
のもと繁榮を謳歌する花洛^{みやこ}には、桃山
画壇の光と影が交錯していた。



3



は せ がわとう ほうく
長谷川等伯 (1539~1610)

しやうりん ずびやうぶ
左. 松林図屏風 (国宝) 〔前期〕
6曲1双 安土桃山時代・16世紀 東京国立博物館蔵

太閤秀吉がとりたてた絵師等伯の奇跡的作品。
朝の冷気の中にひっそりと松が浮かび上がり、屏風
の前に立つ人をいつしか風景の一部としてしまう。
この「静かなる絵」は、濃淡の松の形象によって、
日本独自の価値観である幽玄を描き出す。



若 冲

Jakuchu VS Shohaku

蕭 白



4



いとうじゃくちゅう
伊藤若冲 (1716~1800)

さぼてんぐんけいずふさま
1. 仙人掌群鶏図襖 (重要文化財)
6面 江戸時代・寛政2年(1790) 大阪・西福寺蔵

色鮮やかな群青の岩と緑青のサボテン(仙人掌)を両端に配し、全体を金箔で覆った金色の空間に、鶏が遊ぶ。若冲得意の形態にデフォルメされた鶏が、細密に描写され視線を交わしながら緊張感をもって配されている。若冲75歳の作。

いしどうろうすびょうぶ
左. 石灯籠図屏風
6曲1双 江戸時代・18世紀 京都国立博物館蔵



妻をめとらず、ただ絵画制作に生涯を費やした伊藤若冲。対象を凝視しながらも、あり余るイマジネーションで形態そのものの面白さを追求した作品は、見る者を不条理な夢の世界へと誘う。曾我蕭白は、強烈な自我を画幅いっぱいに表現する。雄渾な筆致から立ち現れる奇怪な世界は、悪夢のようなユーモアと諧謔が溢れている。^{アヴァン}
18世紀京都画壇に忽然と登場した前衛^{ギヤルド}画家、奇想派。その試みは今なお見る者に衝撃を与える。



5

そ が しょうはく
曾我蕭白 (1730~81)

からじしす
左. 唐獅子図 (重要文化財)
2幅 江戸時代・明和元年(1764)頃 三重・朝田寺蔵

もと本堂内陣左右の壁に貼り付けられていた阿吽の唐獅子図。渓谷は、獅子の棲む天台山の石橋か。獅子の姿には、迫力とユーモアが共存し、描線は蕭白の精神を映し出したように激しい。蕭白30代中頃の作品。

ぐんせんす びょうぶ
下. 群仙図屏風 (重要文化財)
6曲1双 江戸時代・明和元年(1764)頃 文化庁蔵



6



応挙

Okyo VS Rosetsu

芦雪



7

まるやまおうぎよ
円山応挙 (1733~95)

もうこずびょうぶ
左. 猛虎図屏風 (左隻)

6曲1双 江戸時代・18世紀 個人蔵

日本の絵画を革新した応挙は、虎や豹(虎の雌として描かれる)のさまざまな形と、色鮮やかな毛によって猛々しさを表現している。この金屏風の前に立つ人は、誰しも虎の迫力に氣^けづ^おされるだろう。

ほづがわすびょうぶ
下. 保津川図屏風 (重要文化財)

8曲1双 江戸時代・寛政7年(1795) 京都・千總資料館蔵





写生画風によって18世紀の京洛に新しい風を呼び起こした円山応挙。穏和で浪漫主義的なリアリズムは一世を風靡し、江戸時代の絵画史を塗り替える。応挙に師事しながらも、表現主義的でマニエリスティックな作品を手がけ、破門説まで伝えられる長沢芦雪。人の意表をついた斬新な構図は、奇想に溢れ機知に富む。不肖の弟子か？ 出藍の誉れか？ 強く反発し、ときに惹かれ合うふたつの個性。百花繚乱の京都画壇に至高の師弟対決が繰り広げられる。



8

ながさわ ろ せつ
長沢芦雪 (1754~99)

とら ず ふ ま
左. 虎図襖 (重要文化財)

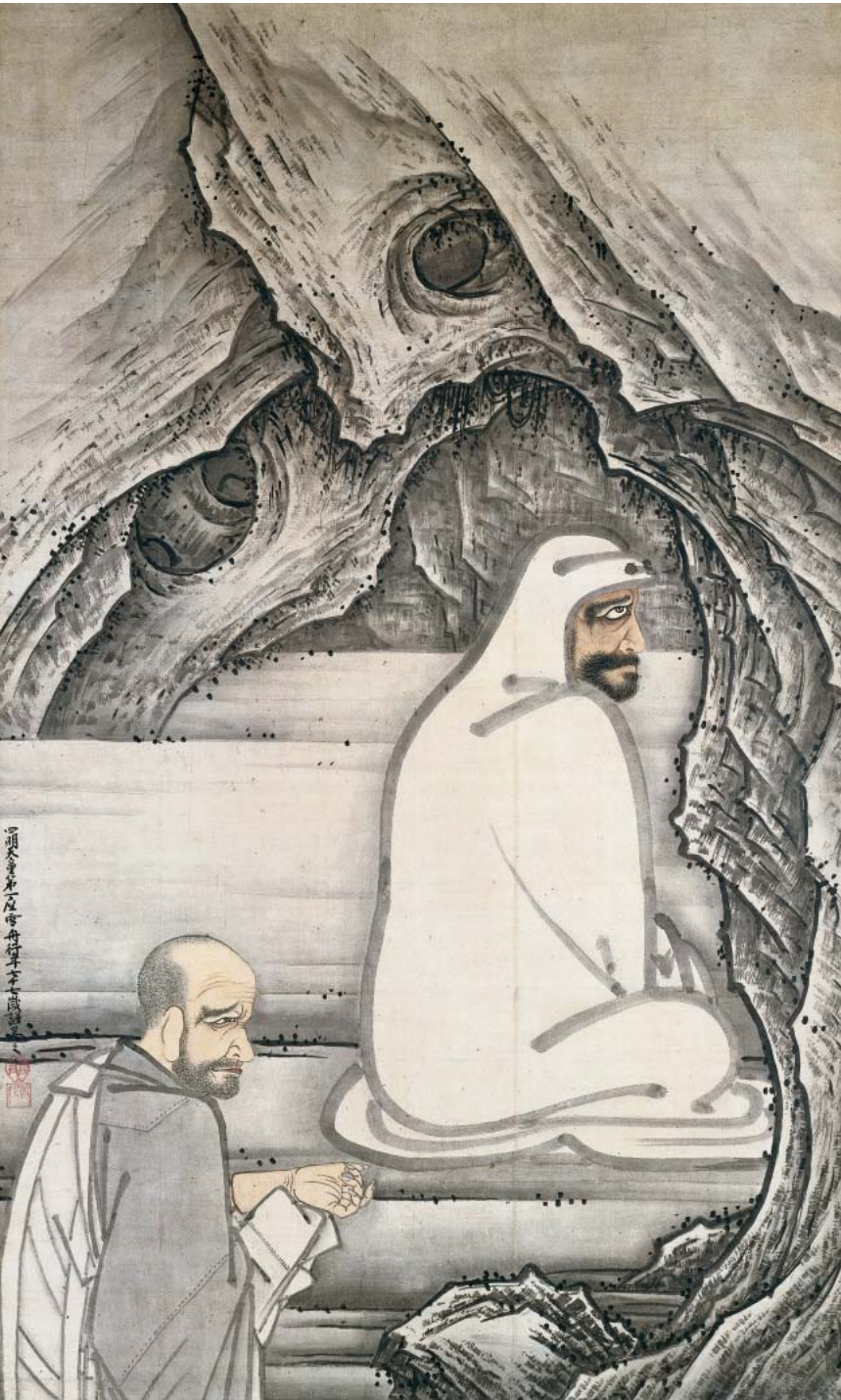
6面 江戸時代・天明6年(1786) 和歌山 無量寺・串本応挙芦雪館蔵

日本で最大の虎の絵(虎は3mを超える)といわれる。顔より大きな前足や、長すぎる尾が、今にも襖から飛び出してくるような躍動感を生み出している。猫を思わせる顔の虎の襖絵の裏には、魚を狙い前足を伸ばす猫が描かれている。

かいひん きしょう ず びょう ぶ
下. 海浜奇勝図屏風

6曲1双 江戸時代・18世紀 アメリカ・メトロポリタン美術館蔵
Image © The Metropolitan Museum of Art.





9



10

VS

雪舟

Sesshu VS Sesson

雪村

京都から離れ、西国に活躍の場を見出した雪舟は、後に中国へ渡り、水墨画の本質を体得した。鋭く力強い筆線から生まれる静謐な画境には、挫折と試練をへた強い自我が込められている。一方雪村は、東国各地を遍歴し、独学で自らの絵画世界を完成させた。朗らかで柔らかな筆致は、あくなき旅と思索が養ったおだやかな遊び心を映し出す。室町時代の2人の画僧の強烈な個性が響き合っている。

せつしゅうとうよう
雪舟等楊 (1420~1506?)

えかだんびず
左. 慧可断臂図 (国宝)

1幅 室町時代・明応5年(1496) 愛知・齊年寺蔵
岩に向かって坐る達磨。弟子になるため、切断した腕を持って近づく慧可。本図には禅宗の師資相承の瞬間が描かれている。ゴツゴツした硬い岩と対照的な、達磨のふっくらとした身体を包む柔らかな衣の質感。雪舟の破格の技が表れた大作である。

せつそんしゅうけい (生没年不詳:
雪村周継 活躍期16世紀)

りょどうひんず
右. 呂洞賓図 (重要文化財) [前期]
1幅 室町時代・16世紀 奈良・大和文華館蔵

雪村の絵には、人物画でも山水画でも花鳥画でも、不思議なうねりや動きが感じられる。雪村の絵の面白さは、そうした運動感覚にある。本図でも、風にはためく衣や髭、足元の波を描く独特の線にそれがよく表れている。

大雅

Taiga VS Buson

蕪村

京都の町人の子として生まれ、中国明清時代の絵画を慕った池大雅は、文人画という新しい絵画の在り方を実践した。明るくおおらかな画風を形成、一世を風靡する。大坂の郊外に農民の子として生まれた与謝蕪村は、江戸に出て俳人として成長したが、中国最新の絵画傾向にも惹かれ、詩情溢れる画風で個性を発揮する。両者は「日本文人画の祖」として後世の画家たちに大きな影響を与えた。

いけのたいが
池大雅 (1723~76)

じゅうべんじょう ちょうべん ず
左. 十便帖のうち釣便図 (国宝)
1帖 江戸時代・明和8年(1771) 神奈川・川端康成記念会蔵

中国の文人李漁が山麓の廬での生活の「便宜」を詠んだ一連の「十便十二宜詩」のうち、十便を絵画化する。蕪村の「十宜帖」と対をなす。明るくおおらかな筆で描かれた10図には、47歳の大雅がすでに老成の貫禄を示す。

よ さ ぶ そん
与謝蕪村 (1716~83)

じゅうぎじょう ぎぎょう ず
右. 十宜帖のうち宜晝図 (国宝)
1帖 江戸時代・明和8年(1771) 神奈川・川端康成記念会蔵

「十便十二宜詩」の十二宜を十宜に減じたのは大雅の「十便帖」と図数を合わせるため。季節や時刻あるいは気象に応じて常に楽しめる隠棲生活を、さまざまな描法で描き分け、俳諧師としての鋭い感性と工夫をみせる。



11

VS



12

光悦

Koetsu VS Chojiro

長次郎

書画、陶芸、漆芸など諸芸術に通じた万能のアーティスト光悦の作品には、含蓄に富んだ人間性が投影されている。一方長次郎は、日本におけるデザイナーの始源ともいべき千利休の指導のもとで作陶、楽焼の祖となった。無作為を作為した侘び茶の美意識を、茶陶のなかに完璧に表現。茶の湯が大成をみた安土桃山時代に現れた巨匠光悦と名匠長次郎により、新たな工芸史の可能性が示された。

ほん あ み こうえつ
本阿弥光悦 (1558~1637)

くろくちやわん めいしぐれ
左. 黒楽茶碗 銘時雨 (重要文化財)
1口 江戸時代・17世紀 名古屋市蔵

本阿弥光悦は書、陶芸、漆芸など多方面に才能を発揮した。時雨の銘をもつこの茶碗は、胴に窯割れが生じ、釉薬はきわめて薄く土肌があらわれているなど、個性的で奔放な作為が盛り込まれている。

ちようじろう
長次郎 (生没年不詳:活躍期16世紀)

くろくちやわん めいしんかん
右. 黒楽茶碗 銘俊寛 (重要文化財)
1口 安土桃山時代・16世紀 東京・三井記念美術館蔵

千利休(1522~91)は自らが求める理想の茶のために、陶工長次郎を指導して茶碗を焼かせた。手づくねで成形され掌にすっぽりと収まる自然な起伏をもった造形、艶のない落ち着いた釉調に特徴がある。



13

VS



14

運慶

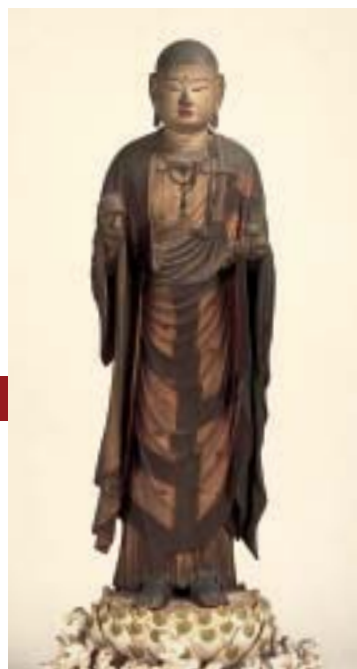
Unkei VS Kaikei

快慶

武家政権が登場し、仏教世界にも新しい風が吹きはじめた鎌倉時代初期。運慶と快慶は動と静、対照的な造像で新しい時代を牽引した。



VS



うんけい
運慶 (?~1223)

左. 地蔵菩薩坐像
(重要文化財)

1 軀 鎌倉時代・12世紀後半
京都・六波羅蜜寺蔵

かいけい
快慶 (12世紀末~13世紀前半)

右. 地蔵菩薩立像
(重要文化財)

1 軀 鎌倉時代・13世紀
奈良・東大寺蔵

仁清

Ninsei VS Kenzan

乾山

名匠・仁清は華やかな作陶を行い、王朝趣味に満ちた典雅な色絵で京洛をとりこにした。尾形光琳の弟である乾山は、上層町衆としての学識と美意識が潜む器を生み出した。江戸中期の京焼に新たな世界が開かれる。



VS



のむらにんせい (生没年不詳:
活躍期17世紀)

左. 色絵吉野山図茶壺
(重要文化財)

1 口 江戸時代・17世紀
福岡市美術館蔵

おがたけんざん
尾形乾山 (1663~1743)

右. 色絵紅葉図透彫反鉢
1 口 江戸時代・18世紀 個人蔵

宗達

Sotatsu VS Korin

光琳

江戸時代の初め、やまと絵の伝統を復興させた俵屋宗達と、百年後に宗達画を慕い、その装飾性と意匠性に磨きをかけた尾形光琳。時空を超越して受け継がれた伝統は、〈琳派〉という豊かな美の流れを形づくった。



VS



たわらや そうたつ
俵屋宗達 (生没年不詳:活躍期17世紀)

上. 葛の細道図屏風 (重要文化財)
6曲1双 江戸時代・17世紀 京都・承天閣美術館蔵

おがたこうりん
尾形光琳 (1658~1716)

下. 菊図屏風
6曲1双 江戸時代・宝永元~5年(1704~08) 個人蔵

円空

Enku VS Mokujiki

木喰

諸国を行脚しながら鋭彫りによる造仏を行った円空と、やはり各地で仏像を作りながら全国を踏破した木喰。江戸中期に現れた2人の僧は、地方の民のために仏を彫り続けた。



VS



えんくう
円空 (1632~95)

ぜんざい どう じ りゅうぞう
左. 善財童子立像
1軀 江戸時代・17世紀
埼玉・谷下自治会蔵

もくじき
木喰 (1718~1810)

そう ず かばあぞう
右. 葬頭河婆像
1軀 江戸時代・文化元年(1804)
新潟・十王堂蔵

歌麿

Utamaro VS Sharaku

写楽

女性の肌や姿態を美しく理想化して描き、かつその内面の動きまで鋭く表現した歌麿。特徴を極端に誇張した役者絵で人々を驚嘆させた写楽。美人画と役者絵を表現の極みにまで高めた2人は浮世絵界の好敵手であった。



VS



き た がわうたまる
喜多川歌麿 (1753?~1806)

ふ じん そう がく じつたい うわき の そう
左. 婦人相学十脉 浮気之相
(重要文化財)
1枚 江戸時代・18世紀
東京国立博物館蔵

とうしゅうさいしゃらく (生没年不詳:
活躍期1794~95)
東洲斎写楽

いちかわえびぞう たけむらさだ の しん
右. 市川蝦蔵の竹村定之進
(重要文化財)
1枚 江戸時代・寛政6年(1794)
東京国立博物館蔵

鉄斎

Tessai VS Taikan

大観

東洋伝統の南宗画を集約し、明治・大正の京都画壇を独歩した富岡鉄斎と、岡倉天心の志を継いで明治から戦後にいたる日本画界を牽引した横山大観は、近代日本画を拓いた巨星として鮮やかな対照を成している。



VS



とみおかてっさい
富岡鉄斎 (1837~1924)

ふ じさん ずびょう ぶ
上. 富士山図屏風 [後期]
6曲1双 明治時代・明治31年(1898) 兵庫・清荒神清澄寺蔵

よこやまたいかん
横山大観 (1868~1958)

うんちゅう ふ じ ずびょう ぶ
下. 雲中富士図屏風
6曲1双 大正時代・20世紀 東京国立博物館蔵



伊藤若冲 (1716~1800)

京都の青物問屋に生まれ、40歳から画作に専念した若冲は、鮮やかな色彩で対象を細微に描写し、独特の眩惑的な画風を確立した。庭に鶏を放ち、好んで写生した。生涯妻をめとらず、酒も飲まなかったという。



曾我蕭白 (1730~81)

室町時代の水墨画派・曾我派に親しみ、グロテスクなまでのユーモアを示した作品を描いた。偏屈な性格で知られ、友人宅から提灯代わりに行灯を借りて帰った話や「先生」と呼ばれるまで客の応対をしなかった話などが伝わる。



長谷川等伯 (1539~1610)

30代で能登から京へ上った等伯は、長谷川派を形成して、狩野永徳のライバルとして天下人の御用を激しく争った。桃山大画様式の豪放華麗な金碧障壁画を残す一方で、中国絵画や雪舟に倣った独自の水墨画を確立した。

狩野永徳 (1543~90)

狩野派の嫡男として早くから天賦の才能を発揮した永徳は、織田信長や豊臣秀吉の御用をつとめ、豪壮で力動感溢れる桃山大画様式を確立した。安土城や聚楽第など大建築の障壁画に絵筆をふる。疲労がたたったのか47歳で早世。



円山応挙 (1733~95)

京都で狩野派に学び、西洋の透視遠近法も体得した応挙は、伝統的な情趣や装飾性も兼ね備えた平明な写生画風を確立し、京都画壇の人気絵師となる。応挙に始まる円山派、またその流れをくむ四条派は江戸時代後期の京都画壇の主流となった。

長沢芦雪 (1754~99)

師の応挙の写生画風に立脚しつつも、おだやかで落ち着いた師の画風と比べ、機知に富み意表をついたような斬新な画風を示す。奇行で知られ、独楽の曲芸に失敗し片目を失ったという説、暗殺されたという説も残る。



本阿弥光悦 (1558~1637)

京都の裕福な町衆として書画・陶芸・漆芸などに長じた文化人であった光悦は、徳川家康から領地を賜り「芸術家村」を作っている。たっぷりとした量感をたたえる書風の書や伝統にとらわれない素朴な楽焼など、各分野に個性豊かな作品を残した。

長次郎 (生没年不詳:活躍16世紀)

もとは瓦作りの職人で、中国の出身であったともいわれる長次郎は、千利休の意を受けて手びねりによる小振りで筒型の楽茶碗を作り出した。「侘び茶」の美意識を反映した楽茶碗は、以降代々千家茶道に用いられている。

池大雅 (1723~76)

幼い頃より天賦の画才を発揮した大雅は、中国の南宗画に学びながら独自の文人画を確立した。天真爛漫な性格で旅を好み、また日本独自の風景も描いた。澀利とした描線、明快な色彩、奥深い空間把握を特色とする。



与謝蕪村 (1716~83)

大坂の出身で諸国を放浪したのち京都に住んだ蕪村は、明清のさまざまな画風や日本の伝統に学ぶなど試行錯誤を経て、ほぼ独学で独自の画境に至った。晩年には絵画と俳諧を大成させ、自らの俳境を絵画化した俳画も残した。



雪舟等楊 (1420~1506?) **K**
幼い頃、涙でねずみの絵を描いた逸話で知られる雪舟は、室町時代の画僧。京都で修行をした後山口へ移り、さらに明へ渡って本場の水墨画を学んだ。激しく硬質な筆致と、独自の空間表現を取り入れた作品で「日本の水墨の祖」といわれる。

雪村周繼 (生没年不詳:活躍期16世紀) **L**
動的でエキセントリックな構成の水墨画を残した雪村は、「雪」の一字を継いでいるものの雪舟の活躍期とは隔たりがあり、直接の関係はなかったと考えられる。生涯京には上らず、東国各地で活躍した。



円空 (1632~95) **O**
美濃の出身で天台僧であった円空は、北海道から関東、関西に至る諸国を遍歴しながら、鑿の削りあとを残した独自の「円空仏」を制作した。生涯で12万体の仏像を作るという大願を立てたといひ、現在まで全国に数千体の作例が確認されている。

野々村仁清 (生没年不詳:活躍期17世紀) **M**
瀬戸で修行した後京都に上った仁清は、茶の宗匠・金森宗和の庇護のもと、優れたろくろ技術と華麗な色彩による王朝趣味溢れる色絵陶器を大成した。仁清のファンは意外にも武士に多く、京都所司代から将軍への献上品にも仁清作品が含まれる。



尾形乾山 (1663~1743) **N**
高級呉服商・雁金屋の三男で光琳の弟である乾山は、遊興癖のある兄とは対照的に内省的な読書人であった。仁清に作陶を学び、光琳の絵付け、乾山の書を施した角皿などを制作している。職人というよりは文人的気質をもった教養人であったといわれる。

木喰 (1718~1810) **P**
江戸後期の遊行僧であった木喰は、木の実や果実だけを食べる木食戒を受けて、北海道から四国、九州に至る全国を行脚し、木彫仏を刻んだ。穏和な微笑をたたえた太った円満な相をもつ独自の仏像は全国に400体ほどが知られている。

喜多川歌麿 (1753?~1806)

江戸後期の浮世絵師である歌麿は、当時評判の女性をモデルにした美人大首絵を描き、一瞬の表情のなかに女性心理の機微を映し出した。当時最高の人気絵師であった歌麿は、華美な風俗を取り締まる幕府の警戒するところとなり、手鎖50日の刑に処せられている。



喜多川歌麿



東洲斎写楽 (生没年不詳：活躍期1794~95)

歌麿と同じ頃活躍した写楽は、現実を直視し、迫真の表情をとらえた役者の「大首絵」を発表した。役者の老いなど醜惡な点まで冷酷な程に写した作品は、歌麿から批判を受ける。活躍した期間がわずか10ヶ月であるため、謎の絵師とされている。

依屋宗達
尾形光琳



依屋宗達 (生没年不詳：活躍期17世紀)

富裕な京都町衆であった宗達は、同じく町衆であった光悦とも近く、彼の書の下絵も描いた。やまと絵の伝統に倣いながらも大胆で明快な画面構成と色面配置など独自の作風を示した。

尾形光琳 (1658~1716)

京都の高級呉服商・雁金屋の次男で乾山の兄にあたる光琳は、宗達作品に親しみ、時を超えてその画風に私淑した。遊興に明け暮れて父の遺産を使い果たした頃から本格的に画家として立ち、工芸意匠の分野でも活躍した。

横山大観
富岡鉄斎



横山大観 (1868~1958)

東京美術学校に入学し、岡倉天心や橋本雅邦の指導を受ける。西洋画に倣い輪郭線を廃した画風は「朦朧体」と揶揄された。後に欧米をまわり、近代日本画の啓蒙につとめる。大酒豪として知られ、広島「酔心」を朝昼晩1升ずつ飲んでいたという。

富岡鉄斎 (1837~1924)

幼少の頃から漢学・国学・詩文など諸学を学ぶとともに、絵画にも親しんだ鉄斎は、画業はあくまでも余技であり、文人・学者としての自負を強くもっていた。旅を好み全国各地を行脚した。晩年は独自の画境に至り、多彩な色調による奔放闊達な作品を残した。

運慶
快慶



運慶 (?~1223)

奈良仏師・康慶の子である運慶は、平安末期の優美な作風を脱し、力感溢れる写実味の強い仏像を作り出した。源平の争乱で荒廃した奈良の寺院復興事業に携わり、多くの傑作を残した。

快慶 (12世紀末~13世紀前半)

動的な運慶とは対照的に、静態的な端正を重んじた造像を行った快慶は、運慶の父である康慶の弟子であった。奈良の寺院復興に携わり、運慶とともに東大寺金剛力士像を制作したほか、東大寺の諸像を制作した。

画：山口晃 (やまぐちあきら)

現代美術家。1969年東京都に生まれ、群馬県桐生市に育つ。やまと絵風の画法で、過去と現在が混在した世界に街の俯瞰図や人々の営みを描き込む作品で知られる。確かな筆力で描かれた町並みや人物の細部には独特のユーモアとウィットが溢れ、おかしみと親しみを誘う画風は幅広く評価されている。本展の24人の巨匠の中では、永徳が一番気になる存在だという。

